



骨董集

卷下

76
3258
1



3258
1

醒醒老人隨筆

山東廣

骨董集上編

前帙
二冊



東都書肆

文溪堂梓

明和十六年
六月三日
小田壽吉氏
長男及子
代寫贈

醒：老人積年所著小說九百不讓

虞初。世態情實多而不通。釋史野

乘無所不窺。若夫椎輪大輅。質不勝

文。名物混淆。能哉不能。老人者感於

此。冬伍今昨。指擿誣偽。著为一書。名

骨董集。鄉儒先生或嘲之云。此瑣。



柯尾氏藏書

請取

者。何足以辨矣。吁。大舜好察迩言。孔聖
數誦童謠。吾子知齊東野語。班氏稱街
巷議。後世如田叔禾季。巷叢談。胡元
瑞。莊嶽。季譚。皆是物也。骨董。非何
氏。樓下物也。必矣。比彼不知所作者。
移的就箭。掩耳盜鈴。則大有廷庭矣。

余與老人同一癖。不得不為之一解
嘲也。文化癸酉冬日。杏園主人書于
緬帷之林下。



骨董集上編前帙目錄

上之卷

- 好事之心得 [一]
- 竹馬 [三]
- 蝙蝠羽織 [五]
- 奮吉原兩日のおぼ [七]
- 魚を呼て斗二とりの [九]
- 豆腐紅葉 [十一]
- 銭湯風呂呂始 [十三]
- 行水船居風呂船 [十五]
- 伊勢風呂呂吹 附 風呂呂吹 [十七]
- 目黒餅花 [十九]

- 昔威儀 附 紺屋之 [一]
- 昔人之質朴 [四]
- 曹人形 [六]
- 髭男 [八]
- 粉之看板 [十]
- ころばどとりの下踏 [十二]
- 風呂犢鼻褌 [十四]
- 石榴風呂鏡磨 [十六]
- 金龍山米饅頭 [十八]
- 耳垢取 [二十一]

- 臘脂繪賣 [廿一]
- おぼことりの言 [廿三]
- 浮世袋 [廿五]
- 燈籠踊 [廿七]

中之卷

- 名古屋帯 [一]
- おぼやき・おぼべ [三]
- 行燈 [五]
- 女之編笠塗笠 [七]
- 浮世袋再考 [九]
- 大津繪佛像 [十一]
- 重箱・硯蓋 [十三]

- 釜磨猫之蚤取 [廿一]
- 駒形之螢 [廿四]
- 初雪之句 [廿六]

- 火燧 附 地火燧 [一]
- 挑燈 [四]
- 笠の下よ布を垂 [六]
- 桔梗笠 [八]
- 奥板古製 [十]
- 浅葱椀 [十二]
- 二足三文 [十四]

- 三線鼓さんせんこ古製こせい 十五
- 丸まるづくの支様しやう 十七
- 組父祖母かぢいそぼ之物語ものごと 十九
- 打出小槌うちでこづち附つけ後ご蟹かに 廿一
- 奈良庭ならの電でん 廿三
- 宗祇そうぎ之の蚊屋かむや 廿五

- 紫むらさき革くわ足袋あしぶくろ 十六
- 題目だいめい踊おど蒔繪まきゑ香合かうがひ 十八
- 拵しら游あそ無木むき 二十
- ちまき馬うままきり王牛おうぎう 廿二
- 長崎ながさき柱はしら并なら幸木さいぎ 廿四

前漢目錄終

骨董集上編上之巻

江戸

醒之輯



日本永代藏

○好事こうじの心得こころえ 一

連秋師れんしゅうしの宗祇そうぎ法師ぽうしの此所こゝは泉別いずみべつ塚づかを

ましく秋道あきみちのちやりに時ときちがふた本ほん茶ちや屋やよどける人ひとありてあまのむすぶの
 時胡椒ときこしをいひ小こまゝる人ひとあり坐中ざちゆうととりをすて一いち両りやうけて三さん丈ぢやううけととむ
 ちがふ小こ一いちを思案しあんして付つけるをさうととやうしたちろとと宗祇そうぎ殊外しゆがいよめあふ
 とあり云いとありあり小風雅こふうがを好このむ此志こゝろあつて家産けさんを破やぶる基もとあらんありひ
 を踏ふふと風雅ふうがを好このむいひのべうらぶられ人のありたる話わたりごとある宗祇そうぎの
 あめられととるがめらうと且かつつらつべのちろえすもとめたりと
 ○昔むかしの威儀いぎ附つけ紺屋こんやの白袴しろはかま 二

昔むかしの男女おんなも威儀いぎをほくろをきつらと威儀いぎをうらふとありたる

「をほひを正ちらうむる事あり」
七十一番職人尺歌合文安室徳の時代の繪小とて通人

高人なる小素襖を著女の頭を布めて巻上の夜をくろりて著又のほが折
著する体をさるけるをめで考へ知べし能の狂言の室町殿の御代其時小のぞき

あつたゆりたるを作りゆびありと古老の説あれ其出立も當時の風作
あるべしされば女よゆびたつよ白布をて頭をほみ雨のちを右左小結たれて

それをゆびうしと入掛衣をほほ折て著さめも職人尺の繪よくあつたゆび
今よりあつて四百年なり前の民の女の風体の能狂言のゆびたつとてあつたゆびを

南留別志卷之二小云田舎の女の綿のゆびある物を著したる上よきを礼服とて
古の小袷あつたゆびのされるあつたゆび又もら巻をさるるを礼儀とて職人尺合あつたゆびの繪よも能

の狂言小もあつたゆびあつたゆびの女の装束あつたゆびとあり田舎人の老実あつたゆびも古風
を失つて昔の威儀のちあつたゆびのちつら残たり○紺屋の白袴とて人請今もゆびとて

あつたゆびあり山乃井慶喜元年印本卷之四「ゆびたつたゆびの雪や紺あつた白袴」といふあり崑山集

慶喜四年撰 中も此句を載て貞徳の句とあれはあつたゆびあり案小當時の紺屋の裳
袴をまきつるゆびも小此語もありあつたゆび今も世盲人猿もあつたゆびの巻よ袴をまきつる
仕女の常小打掛を著るあつたゆびの往古の威儀のあつたゆびあり

○竹馬 三

唐山の竹馬の戯の後漢の時とてあつたゆびとあり 御國の古代の竹馬を

唐山の竹馬とい異なり葉のはれたる生竹よ繩を結びて手綱とてされふやう
かりてまきつる竹馬の戯といハ竹馬の友とてあつたゆび則是ありたふ摸しあせふ

古語をさるるべし今の世のちとて幼の頭の形よほくまたる物よのあらは
雑技の条よ云主生忠見幼童之時内裏より有召無衆物とて難參之由と

申然ハ竹馬小あつて可參之由有御定仍進此歌
竹馬ハあつたゆびとてつとよとて今もあつたゆびのりてあつたゆびらん

夫木抄

竹馬を杖あも今いたのむくむらつらハ提びを母ひひは 西行

【新撰六帖】五 竹馬小あねありあれ〜そのあねのよういあれども忘れやいし
九條二位入道知家

右の古歌を考ふるよ或いありあらうとよひ或杖もたのむとひ或ハウ

あれ〜とのいよをたよのらりと古畷の生竹小乗たのむよふよ〜異制

庭訓 遊戯の事をあ〜ゆる各竹馬馳といふことありたよあらうと古

畷の如く生竹を馬す〜馳ら〜ゆる事よや異制庭訓ハ虎関和尚の作あれバ

あつたことあり【下学集】騎竹之年指す角之童子とあり騎竹といゆるも竹よ

騎戯るの謂あるべし

○昔人の質朴

【一代女】貞享三 一之巻小云此四十年跡すい女子十八九も竹馬よ乗て門

小並び男の子もさぶらつて廿五よ〜元服〜小あ〜ゆ〜〜〜
昔の世や〜

按るよら小四十年跡といふは正保の比いあ〜れ正保の今文化十年よりあ〜と百六十七年
あ〜前より當時の人情の質朴も小點〜ら〜もあ〜幼〜あるとあ〜り今十八九の
生竹は

古代竹馬圖

此畷ハ元禄十三年の印本
山光大師傳のうらより
摹出せりこれハ正和年中の
古画を摹して刻したる
〜あれい因ま〜こと〜
正和年中の今文化十年より
あ〜と五百余年の
〜た昔ありあ〜を
あ〜



五百年の
昔のやらの
遊の情
今と
〜た昔ありあ〜を
あ〜

在畫苑 安永四 百鬼夜行の古画を
 年印本 此畫の竹馬のさぬをを
 編みたる其の竹馬のさぬをを
 多れとも當時の竹馬のさぬをを
 好古小鏡小本朝畫史を合考す
 百鬼夜行の明德の比の古画あり明德の
 今文化十年よりかゝる竹馬のさぬをの
 昔より物の頭の取はは竹馬のさぬをも
 ありあり物あり



百鬼夜行の定て歳画の怪物
 多れ竹馬のさぬををりたる
 唯そのありしを
 ありあり

唐山の古銅器小童児竹馬を持たる形を
 鑄たるあり銅色宋時代の物との鑑定
 のその臨本を得て竹馬のさぬを
 宣和年間の物と
 鳥羽院の保女の
 比より今文化十年よ
 九十余年ありなれをあるべ
 見五歳のての橋車の
 樂あり七歳のて
 竹馬の歡ありと橋車の
 對してこれ唐山の此画の如く竹馬あらん
 彼是を考ふる小生竹を馬より
 日本様あらん駒の頭より唐様あらん
 中昔よりありあり彼も是もありあり



鳥羽院の保女の
 比より今文化十年よ
 九十余年ありなれをあるべ
 見五歳のての橋車の
 樂あり七歳のて
 竹馬の歡ありと橋車の
 對してこれ唐山の此画の如く竹馬あらん
 彼是を考ふる小生竹を馬より
 日本様あらん駒の頭より唐様あらん
 中昔よりありあり彼も是もありあり

此繪筆者、ハハ詳する、ハハ也。
い、ハハも、ハハ画、ハハを、ハハ以、ハハて、ハハ時、ハハ代、ハハを、
考、ハハる、ハハよ、ハハ時、ハハ永、ハハ正、ハハ保、ハハの、ハハ世、ハハの、
古、ハハ画、ハハを、ハハ予、ハハわ、ハハん、ハハ其、ハハ時、ハハ代、ハハの、
繪、ハハを、ハハ今、ハハと、ハハ名、ハハを、ハハら、ハハす、
い、ハハわ、ハハひ、ハハの、ハハた、ハハら、ハハん、ハハが、
か、ハハも、ハハる、



○ 蝙蝠羽織圖
五

杏花園藏

五

慶安三年の印本、ハハ松、ハハ之、ハハ双、ハハ紙、ハハ上、ハハ文、ハハ卷、ハハよ、ハハり、ハハた、ハハ物、ハハの、ハハ品、ハハ也。
以、ハハ名、ハハ条、ハハの、ハハ「ハハ袖、ハハを、ハハい、ハハら、ハハん、ハハが、ハハり、ハハま、ハハり、ハハ上、ハハり、ハハた、ハハ」
編、ハハ蝠、ハハ羽、ハハ織、ハハと、ハハい、ハハふ、ハハと、ハハす、ハハ。、ハハ此、ハハ繪、ハハの、ハハ卵、ハハが、ハハい、ハハら、ハハん、ハハた、
當、ハハ時、ハハの、ハハ鳩、ハハ羽、ハハ織、ハハと、ハハい、ハハふ、ハハと、ハハす、ハハ。、ハハ此、ハハれ、
寛、ハハ永、ハハ正、ハハ保、ハハの、ハハ繪、ハハと、ハハ決、ハハひ、ハハれ、ハハハ、ハハ今、ハハ文、ハハ化、ハハ十、ハハ年、ハハと、
お、ハハし、ハハと、ハハ百、ハハ七、ハハ十、ハハ年、ハハの、ハハ前、ハハの、ハハ切、ハハり、ハハが、ハハり、ハハす、

襷の文様ハ田字草也。
これ本草綱目の藟ナリ
す。今ハ花切ナリ。



武時極意

曹人形 六

増鏡 うちの雪の条に「五月五日初」御あぶらの花と玉とをさし

あぶらさうめれと云くとのりあはるの八十八代 後深草院位よりせぬいと

あくあはるまの建長三年辛亥五月五日の事あり 南畝叢書小載る某の隨筆に

右の増鏡の文を引て云曹花の紙をめて曹をほく其上よりゆくの花をめて

あまひの紙をて人形をつくりをえまじてつらひのめをびよるとあり今の端午の

曹蒲曹此遺制あるべしと云りあはれ此説小よりあつて日本歳時記

五年のうちの繪をえり曹の上より人形をつくりをえたる番ありこれをめてあり小曹

人形との名目の原曹の上より人形をほくをえたる色もあつてひを後曹と

人形と別の物ありて人形をつくりを曹人形といひ畧く曹と云りゆひたるあ

下然則右の隨筆小曹の花の曹のう小紙よ人形をつくりをえたることあり

説小く合曹人形の曹の花の遺制あること疑あつらん曹人形といひ義もこれあり

わたらうありた小模一あらりと番をえて考一母のへ日本歳時記 卷之四端午の

曹蒲曹太の事をいする条に「此事むりの厚紙よ人形をり舟薄き板を曹の

形小くら或は菰の葉よ馬を作り或は木を長口のさく小けりあど一戸

外小立侍りしが近年の風俗美巧をこのて木をりて人馬の形をまらざるよ

いろこよと彩色をわどろ或は甲曹をきを剣戟をりて戦闘の勢ひをまじめて

戸外小立侍る是を曹といふ云くとあり按紙小人形をり舟板を曹の形を

うららるといふ昔の曹人形の質素のさめあべ貞享の時昔といふる

づれの比をさすゆ

○園太曆文和四年五月五日の冬小曹蒲曹甲の事えゆれば此名目もゆら

事あり文和の九十九代 後光嚴帝の御宇あり

○因小云山乃井 慶安元年 誹諧系屑 元禄七年 等五月五日の冬小曹蒲曹の事

あど小なむらびせて削熱の甲と云名目を出せり木を削りて曹の形小作りたる物故

貞享五年板

日本歳時記

卷之四 此書あり
右の書よりなり
人形を



あつさ紙よ
あつさ紙よ
藤桐まつりた
ゆのこぞ

二種
曹人形圖



此畵は延宝天和の
時代の繪のうち
の草画よ
微細のひと
考證のひと
横一ひと

○ 舊吉原の両中（七）

万治二年印本 秘可多曲 香花園 小云むりり 江戸のううれぬの所

そむ也 中界 此処乃遊君は両ある時あり道ありきよのろくあるありと
奴のどある小負てたたりありと奥あればんときまにそ宿の門小入ぬれが
たれやうんよき作る

はく井筒井づにけりろく後縄負にありをきよまに
あどよとろくろの肩がまよきまに全盛らうりきよまに
つたて遊女一

とあるよみしと也 異本洞房語園 享保五 年ノ記小云元和年中元より原の比兩のある時
お女ども揚屋へ通ふ小下男どりの小おりれて行たりかひれ松の六尺の繩をりて草に
両のものをうろくしてそのお女いあがた小袖をて足をほくみりてそを長くたきて

雨の膝を六尺の手のうしろのせて臂をとり衣紋のつろひて後より長柄の傘をに
 かけさせたる辨あり品よく見え」ととり其古番を摸して左小あらいせきと貞享
 元年板 **三代男** 詞花堂 藏本 一之巻小江戸三聖の薄雲が揚屋入のうめをひいたる
 条に云 **紫立ち** 曙のうめをさむらひのおむろひふりんつきの傘角助がさう掛
 肩で風まらしてらら〜ゆる粧の玉兩枝ある白梅落と詩人あらの詠むべた呀
 角助が背中小乗うりりありありさむらひの如まう〜さふおれおんさうりの光を
 云」とあれは吉原今の地小うりり〜後にも負して揚屋入あくる事あり〜歎
 ○周云元龜の比高祿の武士の妻女も乗物小乗事ある嫁入の時も麻の
 ちつきを著て負木といふりの尻けけう〜ろさむ小負してゆたける〜
 古老の説のど當時の質素の風をどび等〜も積りたるあるべし
 ○元吉原今の地小うりり〜明暦三年あり **私可多** 西の万治二年の板より
 元吉原の時をまことりづる小二年あれが證とどる小たれり

右小の **私可多** とら
 車笠のうらに此繪あり
 多則元和年中
 今の大門通吉原
 あり一時のさゆら
 今文化十年よりりて
 とも二百年小近き
 背あり ○あり袖の
 あり衣服のゆたつと
 みたろー ○下男の
 茶光髪あり背
 質素の風群えるべし
 ○右よりうちゆる **三代男** の
 うらもあいのうたを
 あり〜ありひたされが
 あり〜あり



万治式 己年 季秋 吉日
 興言あり

○豆腐の紅葉 十一

塚鑑 天和三年印本 下之巻「紅葉豆腐の事何國も豆腐のめれども別て富津のを勝たり」と古人より云傳と紅葉と云名を加たるその塚の櫻鯛ももつら味あれいとあつとるを花の對する紅葉の縁あるべし又或人の云此豆腐を人のあつとるを祝て付たる名ともつり買様と紅葉と音便成りて故今豆腐の上は紅葉を印を詞に就て形を顯るべし買用も通てつしあつとる今買は紅葉の形を印する事塚の紅葉豆腐は始とるあり紅葉を買様と取あつとる幼氣あれど昔此類あつとるにせむる名註よとつとるのよれをりて祝とよるあつとる

○岡小云古老の説は南天といふ木の本名南天燭あり手水鉢の下は植食物のつとるにせむる諸毒を解するあり鏡の下は敷又裏小鑄をあつとる南天を難轉小取とて難を轉とつとる意よとする禁厭ありといふ

紅葉を買様小取あつとも此だひあるべし能の狂言鑪庵丁といふ深草の土器よあんらんぐのあつとるを能の狂言鑪庵丁といふ能の狂言のよれとあり

○ころもどといふ下踏 十二

文禄より寛永ののひの古画をみよらひさた瓢箪を火打袋或は印箋巾著の根付とて又瓢箪をうりをもあつとる林をあらけまけけ傳て瓢箪をあつとるの轉さる禁厭ありとされよよりてありは江戸の名物よころもどといふ下踏あり其下踏は瓢箪の形を印するも原彼禁厭のゆよとる事あつとる事よころもどといふ名をあらせむるよとありは江戸のれが推當言あれとありは江戸のよころもど

○江戸銭湯風呂の始 十三

寛永十八年印本「ころもど物語」蔵本 云「ころもど江戸らんをうのころもど天正

寛永正保時代鐵湯風呂古圖

當時ハ男女ともハ髮付油を用る者

此れハ美軟石^{ウツクシイ}にて起すけり

此れハ妙定^{ウツクシク}と云れ申す也

風呂ハ角^{ツノ}ハ髮をあらひあり風呂

味子^{ウツクシク}ありてり

平入獨吟集

前^{ウツクシク}ハ風呂ノ煙も雲霧をあらめ

内^{ウツクシク}ハ打払ハ雲霧もすてぬ洗髮

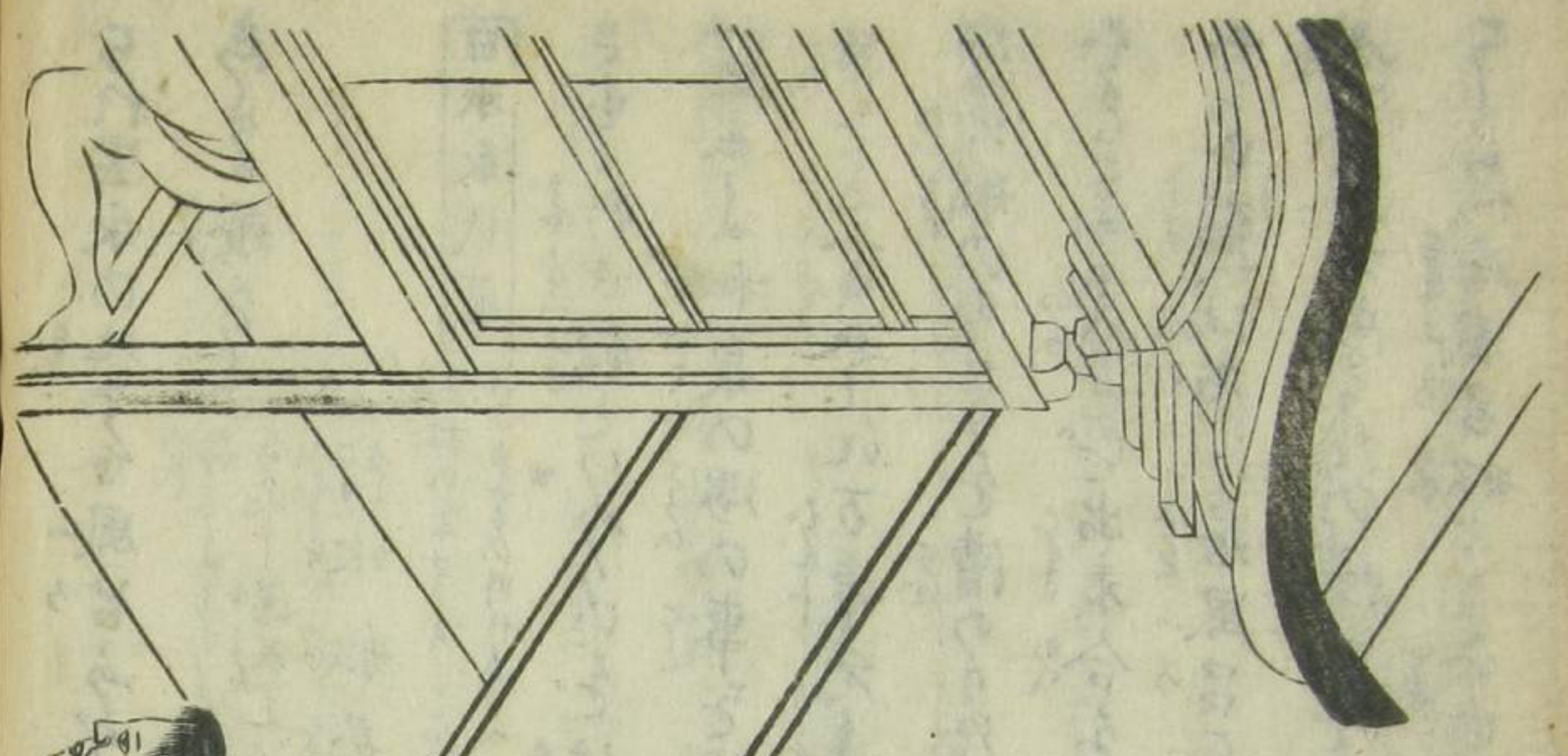
三^{ウツクシク}れも一證とす

寛永正保^{ウツクシク}今^{ウツクシク}なり

文化十年^{ウツクシク}なり

古^{ウツクシク}く七百七十年の

昔^{ウツクシク}なり



其二

當時の常より
煙草をたぐふこと
たゆみ遊歩の
折られたるもの
事あれしなり
うづりら懐中せむ
奴僕よりせむたるもの
夫の長
まことの頭雁の首
仙の首
雁首の名目残さる
火血りて大まき
一代男



此番の右の儀湯風呂よのてぬる舞あり
男女の乱髪ハ布よのてぬる
あらしの髪あり

奴僕の名目
髪ありの
今と異なり

此奴僕の名目
いこの風呂敷の
敷物あり
物あり
料あり
ありても
風呂敷の
名目
残さる

此婦人の髪
いと長

まことの首
髪ありの
○古老云寛永の比の
婦人の帯の廣さ
三つよ鯨尺の二すさ
紙をひくと綿を
ひくとさ
○古老又云昔の
婦人の髪はやく
長髪をたけよ
ゆるるあといひ
やめたり
ついでる
此番よ
ちゆり



男女の乱髪ハ布よのてぬる
あらしの髪あり

婦人の
髪ありの
大異なり
ついでる

石榴風呂 附 鏡磨 [十六]

醒睡笑

元和九年作
万治元年板

この年のたを石榴風呂とらんぞりやあつゝのさうさうの醒と云わくは
 度詞あり屈入とのめを鏡磨といふよりあつゝのさうさうの昔の鏡を磨は石榴の實の
 醋を用たるもあつゝ今ハ梅の醋をりらる

七十一番職人尽歌合 ぬみとだの月の夜よ

水くひやぶらうのさゆにぬげもさやぬみとだの月のあつゝ
 繪も鏡磨のぬらうは石榴を共たたる野をりり此歌合ハ文安宝徳のあつゝ
 つつゝののこりぬきゝゝこゝろ

序武独吟千句 天文九年吟慶安五年刻

前ハ志やくろありけりしものらあつゝあり
 附ハぬみとださ秋の中ハもゝこゝろ

ぬんハ天文の比も石榴を用たるべし是等をりて寤ハ今江戸の銭湯ハ石榴こゝろ

名目あり石榴風呂のあつゝあるべし然則 石榴ハ石榴風呂より出たる名目
 ありとゞろ風呂ハ鏡磨より出たる名目ありゆるすゝあたゝとゞも参考くゝとゞ
 ろゝとゞ母りゝとゞ

七十一番職人尽

鏡磨圖

文安宝徳ハ今文化
 十年よりあつゝと三百
 六十余年の昔あり



伊勢の風呂吹 [十七]

甲陽軍鑑

卷之九下

天二十四年の条云「風呂ハづれの團もはゞも伊勢風呂ト
 中子細ハ伊勢の團流もど熱風呂を好て能吹すゝゝゝ上中下とも熱
 風呂をさゝ在郷中ハ大方村一ツハ風呂一ツげゆとゞゞ夫のらとゞゞも風呂とゞ

鏡磨古圖

画風をりて考るは此繪ハ貞享元禄のころの
多分たらんと云ふは元禄三年板人倫訓蒙書
鏡磨のすすく梅酢のたまりとりのみ根を合て
底の粉をすく梅酢よくとどくとあれが當時ハ
石桶ハ用ざるべし古画よりとつたてぬるしや



用は云鶴岡職人長秋合
わいみ磨のまの秋よ
「磨うまきわこら草を
たりとめてちかりうれば
おりのりあり
おれの昔誦語草の
磨をりひてあをを
磨たるらもありしん



息を存ゆわらぬ風呂とていふとつえ中ひゆわぬ風呂も入つた

らこのころあらざらぬこと「本朝諸士百家記」巻之三摺入の男の志

を立てりてあつたをいふる事あり「廣蓋」のうら風呂敷の昔の十帯取調上よの味

一兩人の催しと風呂入ぬ云々「自笑内證鑑」巻之五大坂道頭堀の風呂屋

のひとある事あり「此風呂」入相の比より来り吹くふれとてあがり場よ坐してま

とつたぬれは宝珠の比より風呂を吹くといふことありあるべし伊勢人の物語をいふ風呂を

吹くといふ空風呂とあることありこれを伊勢小風呂といふ堀を掻者風呂も入る者の方

上息を吹ゆけて垢を吹くありあるべし息を吹うけたるおようのひ出て垢より落るるもの

口まで拍子をとり息を吹ゆつて垢を吹くより上より下よりわけて奥あつたことありその

ゆきよ垢を吹く者を掻けて風呂吹といふ今も伊勢の事ありと語りぬ此物語

甲陽軍鑑より伊勢風呂とあるよりあり然見伊勢の風呂吹はつたたとあること

の「その物語」より銭湯の名ありあから今の湯風呂といわらばあつた風呂

あるべし彼是を参考する昔の風呂はあつたから風呂もあつたあらん十帯を

つと入るもゆら風呂の便宜あるべし「内證鑑」よりありて汲といふことありあつた

湯のころをとりつとひあり○さて大根を熱く蒸して煙の立ちどろろを大根

の風呂吹といふも息を吹くゆけてつらつらあつたの風呂吹といふるゆゑあらん

○金龍山米饅頭 十八

或説よ江戸の名物米饅頭の根元は浅草聖天金龍山の麓鶴屋あり慶安の比此

家の娘よあつた後とつるあり此女始てこれ製を製さかすひがまんぢうといふ此説よは

たよ摸し物と番のころ延宝の比よは辻賣あり米をよひといふ米まんぢうと云

も米のまんぢうと云義あり女の名よよりとよひたるあつたあらんべし常のまんぢうは麩

みくつれい也「紫の一本」天和よ聖天町とよひまんぢうを商ふ根本の鶴屋といふ菓屋に

根本のあつたの鶴屋よみゆらんといふまんぢうのたのめとありとあり遺佚

切是はとて天和の比の居店よ賣たるあらん

江戸鹿子 貞享四「米饅頭屋浅草金龍山あり」とや同所鶴屋とあり

江戸咄 先板川故郷飯江戸咄と題す 巻之五、真土山云々、交の山の麓鹿のふみまんぢうら

江戸中より、まゝに名物と云くひとせと有り、小うらま金龍山と同道とあり、うらま

享保の比の板江戸八景の繪本、金龍山、聖天、二王門ありて、ひがしあり、うらまの鹿あり、近江せよ、其のうらまの鹿あり

延宝六年板菱川の繪本、此辻賣の畷あり



先昔よりまんぢうをいへる、板菱川の、市より貞享板江戸鹿子よ、えゆるありとやあべ

江戸鹿子 真土山の麓、坂の登り口又聖天町の門前、由左右ともに茶屋あり、此麓を伊勢屋の饅頭の名物ありとそ

名物 米饅頭 金龍山 ぬきこや仁衛

られ古に屏風の下張より出た書風あり、うらまの鹿あり、うらまの鹿あり、うらまの鹿あり

享保年中印本
江戸名所百人
一首之繪

月々ろふやう



かゝりのなを
みちのれい
うたれたら
目々ろふやう
これまにかうけ

目黒の餅花

昔目黒不動尊の門前をさうの餅とゆゑを賣りたる福の餅
あつたを吳服のちらと申すまればその物もあつたのちらと申す
思はずにこの御殿のちらと申すべしと申す中比がくはと申す
は日毎よりの供物を同敷と申す中比のちらと申すは
りちりりと不動尊の供物を同敷と申す中比のちらと申すは
忌服の服と同敷と申すを思はば神福と申すは
中比のちらと申すは
まわれと申すは
又昔の不動尊の境内は犬あつたといふ

江戸八百韻 正徳六年板

青雲
来雪

延宝の時より風の吹くはそこの滝の音
附目黒の泉の犬がとびはく
延宝の時より風の吹くはそこの滝の音
附目黒の泉の犬がとびはく
延宝の時より風の吹くはそこの滝の音
附目黒の泉の犬がとびはく

耳の垢取

江戸鹿子 貞享四年板 耳垢取 神田紺屋町三丁目長富とわりの垢取 比京もあり

京羽二重 貞享二年板 耳垢取 唐人越九兵衛とあり 初音草 喇大鑑 一年板 巻之

五よ 京と江戸ゆた 通町の通りをうればあひい歯ぬ死耳の療治

老人養草 正徳六年板 又云近末京師の通り 耳垢取とて紅毛人の切らちよ似と

五元集拾遺 観音で耳をわらせとてかとうぎん

其角

此向も耳垢取の通りをわらせとてかとうぎん

一代男後日 刻板の年号あり 按西鶴が廿五年の 二之巻よ云 松浦淳平戸との所よ

こびらある草の屋をわらせとてかとうぎん 髪を惣をわらせとて長崎一官と名をと

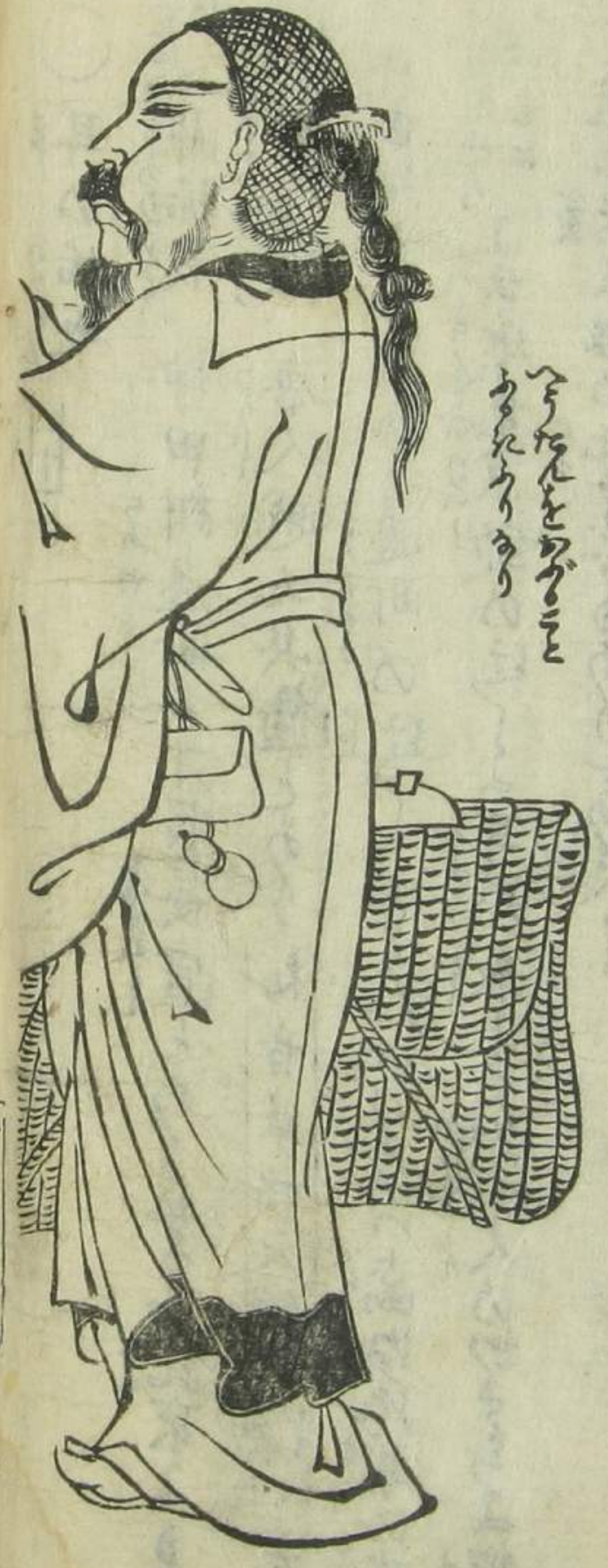
は死都とてかとうぎん 耳の療治人の似とて京の一官顔とて云に物よ 正徳京

よ一官との耳の垢取ありあらん

英氏画譜よも
 耳垢取の番
 あれは草画よも
 横細よも
 英譜よも



耳垢取古高
 亡友六朝此番を
 横して予よあふ
 昔よられえ縁多ふ
 の繪あるべ



今たんとあがると
 ちたくりりり



○ 膳 脂 繪 賣 [三十一]

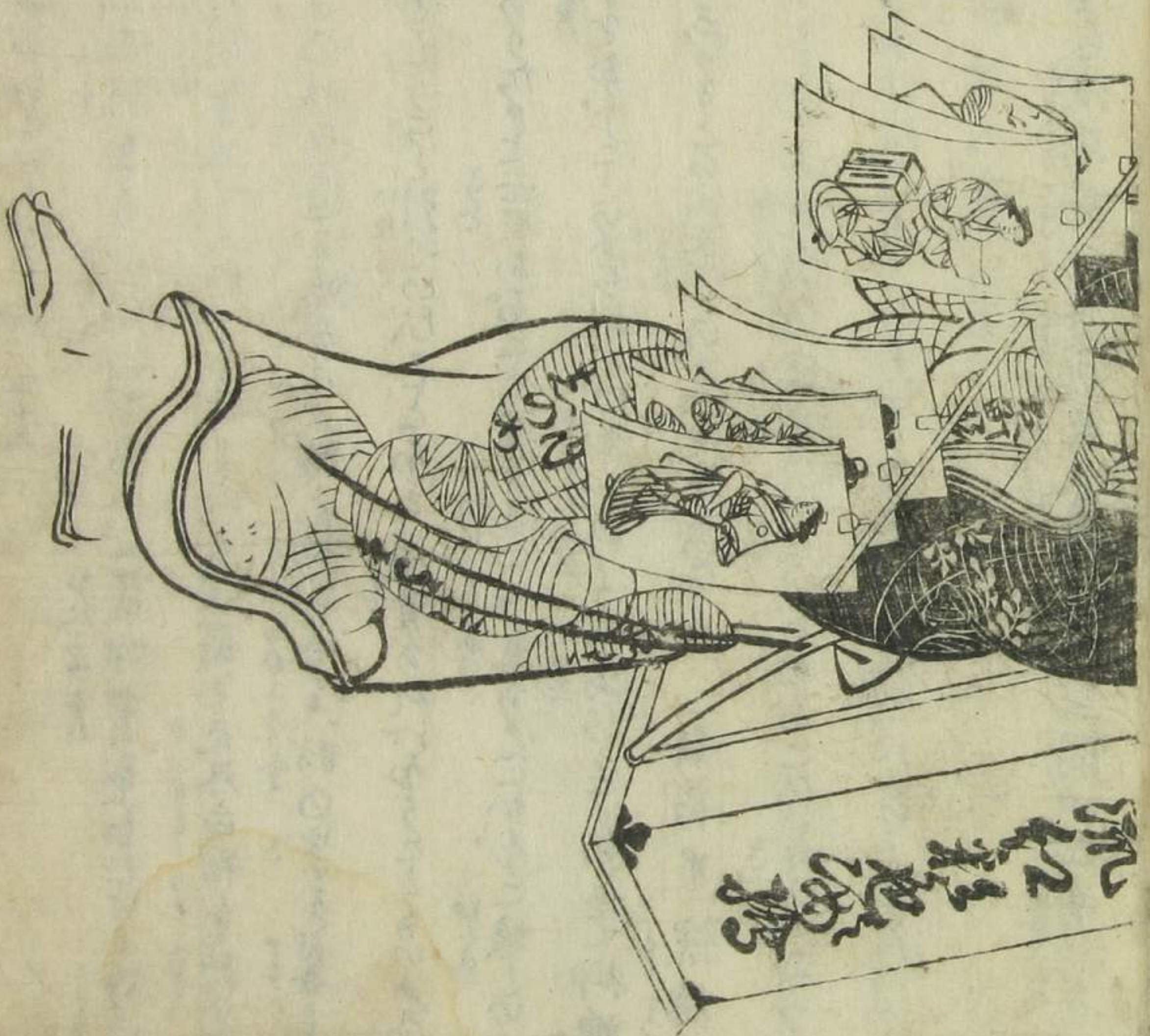
按て板行の一枚繪は延宝天和の比始れる牧朝比奈と鬼の首引土佐淨瑠璃の繪
嵐の嫁入の繪の類は芝居の繪の坊主小兵衛を多ぐるるものと其始るべし
丹緑青あどくまを多ぐるる彩色はなり菱川師宜古山師重等それを画けり
のころめより丹黄汁を彩色とこれを丹繪といひ元禄のころより鳥居
清信其子清倍等それを画けり宝永正徳小至に近藤清春出たり紅繪と云い享保
のころめ創意のあり墨膠を引て光澤を出したるもの漆繪といひ
奥村政信のころこれを多ぐるる近代世事談 享保十
九年板云浅草御門同朋町竹某といふ
者板行の浮世繪役者繪を紅彩色して享保のころめ比よりこれを賣幼童の顔びと
して京師大坂諸國よりこれを又江戸一の産とありて江戸繪といひとあれは摸
出との享保の比の紅繪賣の旨あり
板行の一枚繪のころより延宝天和と決まらん今文化十年より
よりとあるも百十餘年を経たりとあれを多ぐるべし

○ 釜 磨 并 猫 の 蝋 取 [三十二]

西鶴織留 三之巻よ云とたり一年の師より電の上塗を仕よるるを手よりつもの
事と思ひし又そのの暮より達者ある男が釜みかたにありきまある大釜五丈其外の
大小にやらびニ文ぼ也云々手前より人をりぬ者ハ猪手よ云々又五十からその男
風呂敷をうらりて猫の蝋を取まらんと声立てよりける隠居がその手白ニ毛を
ららめしる人それと頼されりよ一疋ニ文ぼは極め名譽は取けるよ猫湯を
あててはひぬれ身を其より狼の皮よほみえちり抱けるよりよ蝋もぬれたる
所をうたがごま狼の皮よりつりけるを大道へあひ捨ける是程の事おもその
とも何よりちり分別仕切 身この種とありぬ云々 猫の蝋よりその者あしと
右の織留ハ西鶴の遺稿を正徳二年刻せるあり門人團水の序より羊書遺しを
ころの葉月よ此きを去ぬと云い元禄六年右の書中元禄二年とある時よ
西鶴の序より七羊板の序より云大坂の西鶴が咄よりひさの風呂敷つとてせり
蝋と云いし口過る者ありと語られ云々



〆 膳 月 繪 賣 圖
これ享保のころの一枚摺の
綴り繪り



噺 雲 奇 截

○おぼろのついで 三十一

御伽婢子の天児の略制あり小児のわらわら置邪祟をあらざる形代あり 雍別府
天和二 土産門小云白絹を以て人形を造り内は糟糠を瓦外白粉を施し髪を御伽母よと
り此偶人元大小母子の形を造る始母子人形と稱せ今人形の字を畧し之をり小云漢書
今云 御伽母子をどうと引てひととちと通音あればむうとちもいあるべし人老
老と小児の如くよありたると二度おぼるといふ女子の幼氣あるをあらと娘といふ鮫の子をか
といひたぐひとて幼をあらとといふれ右の如人形より出たるらとて御婢よをほめたる
らとてとあひらるるあらとといひ清をいめたるらとてあり 合類節用 恍惚子の三字をか
るると刻む字書をさるる恍惚の字義の今りのあむとの義のあむらとて歎かおのれが
推當言よてあむらみけれどあてあひひとせたるらに心たひとあむらつるあり

○駒形の螢 三十四

江戸雀 延宝五 年卯本 十之巻浅草駒形堂の巻よ云「此堂の二間四面南向あり云々」又信

かを催と人の此川よりを取て浅草へ参るととてに取つたうへ出私入私のあり
駒のいまを浦のゆ帆とややさん九夏三伏のあらた此の風をかに吹わうとびり
愛水よりけり勝景ゆかりありてあり繪をえんた堂のわらわらに樹木あり
林をとり又 江戸名所記 寛文二 年卯 駒形堂の面をえんた木立萩ありて堂のまはりた林

○蕉尾琴 元祿十四年板

一つありに舟をよせて 此碑は江を哀しうぬ葉が 其角
中へも眼前の体あるべし今いふやれを人承立つて堂に化さる草だよりとて百余年を
経て繁花の地となりぬ元祿六年駒形に放生禁断の碑立今も存せり右の句意を考ふるよ
裏江頭の杜子美が七言古詩の題に裏江の字義をとり此碑立ら此川のうをのうあむらとてありと
とていふあらん堂の光は碑文をとりてを車削が故事ありとあむらひとせたる哉

○浮世袋 三十五

或人古老の説ありとて語て云幼女子針葉をあらう始よ浮世袋との物をさるら
縫て玩物とて緒を三角よ縫綿を入れて袋めりて上の角よ糸をほくる 何の用
かた物あれども唯針葉をあらうありとてあり世に提女なるあむらを浮世袋といひて
あそびの家の前よ柳を二本植て横手を結暖帯を掛られあそびの名をぬた其やよ

初雪の物をもぐら縫てはあーありそれを浮世袋といひあらりたるありといひて
 五人娘 貞享三 巻之一は浮世づくひといふわかれが貞享の比もむゆひたることあるべし
 又巻之二は浮世笠といふあり 一代女 貞享三 浮世髻 卯子酒 序は宝永 浮世巾著るもど
 りの目ええたるをみる 顔あらん粟嶋といふ踊歌の文よなれ針くさば猿さき世袋
 雛形とあらんゆりゆり今粟嶋の神は手向る三角の袋めく物ハ則浮世袋なること
 知りぬられいをもゆる 謳歌の説をとるあつある考と我ながらをば 粟嶋の神を女神と
 誘ふより童女針葉の達と願をうけ浮世袋を手向るをあらん

○ 初雪の夕 三十六

初雪や犬の足跡梅の花と云わ何人のゆひうなるま 童もららむむむむ 五元集
 の巻云 雑去画竹葉是ハ五山沓の僧雪の聯句ハ犬走生梅花といふ對あり云
 右の聯句よりとつて或の暗合たる歟

○ 燈籠踊の古番 三十七



延宝二年の
 今文化十年より
 百二十九年の
 ありあり

都歳時記

序より延生二年とあり

巻之四云長谷岩藏花苑より六字の念仏より其の
花より巧をばしたる四角ある灯籠を戴てをぐるがれ由肝よりたひと
まらめて口品めり都ももらざらざらあり此所より氏神の前より踊らぬ其年
みちるをたむ亡者ある家より行て夜更をもとごとありありなり例年より
りよりたむるあれが由来るあれより由あれどたひより知者ありと云こ
日次紀事云洛北岩倉花園雨村少年の女子各大灯籠を戴八幡の社前より聚
て男子大鼓を撃手笛を吹踊を勤む是を灯籠踊といふ所より頭上の灯籠踊る
女子の家より春初よりこれを造り互に其作る所の模様を秘して
摸くわらわりの其古番あり



骨董集上編上之巻終

醒齋京傳先生遺稿

骨董集三編 上帙二冊 下帙二冊 全四巻

京山人百樹翁刪定

骨董集曰板嘗本舖へ購へ得るを以て醒齋先生の遺稿を京山翁より公ひ右三編の梓行近に在る寺故に茲に告て新刻の構筆を弘と云

天保七年丙申初夏

江戸書肆

大傳馬町二丁目

文溪堂丁子屋平共衛

